今後の中学生・高校生における柔道授業の検討
：中学校・高校の柔道授業を経験した大学生における男女別の比較

林　弘典[1)]　石川　美久[2)]　生田　秀和[3)]

Consideration of Future Judo Classes in Junior High and High Schools
: A comparison between male and female college students who have experienced judo classes at junior high and high schools

Hironori HAYASHI　Yoshihisa ISHIKAWA　Hidekazu SHODA

Abstract

The purpose of this study was to compare the opinions of university students (those who have experienced judo classes at junior high schools and high schools) on the contents and methods of future judo classes at junior high schools and high schools by gender, and to examine future judo classes at junior high schools and high schools. A questionnaire was sent to 336 university students who had taken a judo class at a university that trains health and physical education teachers. The number of respondents who had answered each question was categorized according to their gender and subjected to a chi-square test; residual analysis was conducted only when significant differences were found. As a result, the following conclusions were drawn.

1. It was suggested that the difference in the proficiency levels of male and female students may delay the progress of the class. Therefore, it is possible to conduct classes according to the proficiency level of learners by conducting classes separately for men and women.
2. When classes are conducted in coeducational classes (some classes are conducted separately for boys and girls), it is expected that classes will proceed smoothly by obtaining the cooperation of boys with high motor skills to support the learning of girls.
3. Since girls were unable to determine whether they wanted to engage in more randori, it is necessary to conduct further research on girls with more randori experience to elucidate the reason.

Key words : Budo, Judo class, Junior high school, High school, Gendered Comparison
キーワード：武道，柔道授業，中学校，高校，男女別による比較

1）スポーツ学部　2）大阪教育大学　3）大阪体育大学

Ⅰ　緒言

2012年より中学校保健体育科において武道が必修となり（文部科学省，online），中学校第1学年及び第2学年の約6-7割の生徒が柔道を選択している（日本武道学会，2016）．武道必修化の直前に，柔道の重大事故が発覚して社会的な問題となり（内田，2013），柔道の実施を危惧する声が高まったが（小林，2011），近年，中学校や高校の柔道の授業では，頭部外傷や頸椎損傷に関する重篤な事故が起きたという報告はない（JAPAN SPORT COUNCIL, online）．重大事故における頭部外傷の研究（Hayashi et al., 2020；Ishikawa et al., 2020；生田ほか，2021）は進められているが，未だに部活動等で重大事故が発生していることから（全日本柔道連盟，2020，online），教員は中学校・高校の授業でも重大事故が発生するという危機意識を持ちながら，学習効果が高まるような授業内容を模索していくことが重要である．

中学校や高校の柔道の授業は部活動と異なり，学習指導要領に基づいて実施されている．その武道の授業概要には，「武道は，武技，武術などから発生した我が国固有の文化であり，相手の動きに応じて，基本動作や基本となる技を身に付け，相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって，勝敗を競い合い互いに高め合う楽しさや喜びを味わうことのできる運動である．また，武道に積極的に取り組むことを通して，武道の伝統的な考え方を理解し，相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視する対人的な技能を基にした運動である」と解説されている（文部科学省，2016，2017）．

林ほか（2021a）は，中学校あるいは高校の時に柔道の授業を受講したことのある大学生にアンケートを実施した結果，「我が国固有の文化」「武道の伝統的な考え方」「相手を尊重して練習や試合ができる」に関する学習が不十分であったと報告している．このことに関して，スポーツと武道の違い，柔道の正式名称，成立年，理念，嘉納治五郎師範の遺訓を学習させることが必要であると指摘されている（林，2017a，2017b）．また，林ほか（2021b）は，男女の物事の考え方には違いがあることから（アラン・バーバラ，2006；ジョン，2003；佐藤，2017；八ッ橋，2015），今後の中学生・高校生における柔道授業の学習内容や方法に対する男女の考えについて検討している．その結果，男女別習で授業を行うこと，絞め技（首を絞める技）や関節技（肘を伸ばしたり，捻ったりする技）を学習することについて，有意な差は認められなかった．中学校･高校生における多くの柔道授業では，男女共習が基本であるが，学習内容を高めることを目的に，男女の考え方の違いから学習内容や方法を検討することは今後の柔道の授業を発展させることにおいて意義があると考える．

生田ほか（2021）は，中学校あるいは高校で柔道授業を経験した大学生を対象に，中学校・高校の柔道授業の指導内容を明らかにしている．それによると，自らの腕や脚，相手の襟を用いて頸を攻める「絞め技」，相手の肘関節を逆に伸ばしたり，捻ったりして相手を攻める「関節技」を学習した者が約6％いたことが報告されている．現在の学習指導要領では禁止事項であり，絶対に行ってはならない行為である．まずは大学等の柔道授業において絞め技や関節技の学習を慎重に研究を進め，安全性が確保できる前提で学習効果を実証することが先決である．そして，今後の学習指導要領の改訂において，絞め技や関節技の学習が導入された場合に指導するべき技術である．

中学校や高校の授業は学習指導要領に基づくことが大前提であるが，学習指導要領の改訂に向けて武道の必修化における柔道の教育効果を高めるために，さまざまことを検討していくことは重要であると考える．例えば，

「武道は武技，武術などから発生した我が国固有の文化であること」を理解させる新たな学習内容や方法を検討したり，それに対する学習者の考えを検討することは，武道必修化における柔道の学習内容を発展させることに寄与する．また，男女別の視点から学習内容や方法に対する学習者の考えを明らかにすることは，今後の中学校や高校における柔道授業を検討するために有用であると考える．

そこで本研究の目的は，今後の中学校・高校における柔道授業の内容や方法に対する大学生（中学校・高校の柔道授業経験者）の考えを男女別に比較し，今後の中学生・高校生における柔道授業の検討することとした．

Ⅱ　方法

1．調査期間・対象

2021 年 7 月に保健体育科教員を養成する大学における柔道の授業を履修した大学生 336 名（男子 300 名，女子 36 名）にアンケートを実施した．履修者の中には，保健体育科教員を希望しない学生も含まれている．対象者には，研究内容について十分に説明を行い，同意を得てアンケートを実施した．本研究は，びわこ成蹊スポーツ大学学術研究倫理専門委員会における研究倫理審査で承認されたものである（成ス大第 16 号）．

2．調査内容

今後の中学生・高校生における柔道授業の検討するために，どのような内容や方法，考えがあるのかについて先行研究（林，2017a，2017b，林ほか 2021a；石川，2017）を参考にした．次に，今後の中学生・高校生における柔道授業について男女別で比較した先行研究（林ほか，2021b）から具体的な質問項目（10 問）を作成した．

アンケート実施において，対象者には，現在大学で受けている柔道の授業ではなく，中学生・高校生における柔道の授業を受ける場合を想定して回答するように補足説明を行った．選択肢は，「はい」「いいえ」「分からない」の 3 つとした．ただし，「男女別に授業を行いたいと思いますか？」についてのみ，その理由を自由記述で回答させた．なぜなら，前述の先行研究（林ほか，2021b）において，男女別習で授業を実施する理由が解明されておらず，今後の男女別習の柔道授業を検討するために重要であると考えれるからである．

3．分析方法

質問ごとに回答者数を集計した後，男女別に分類して χ^2 検定を行った．その結果，有意な差が見られた場合のみ残差分析を行った（田中，1996；田中・山際，1989）．統計処理には，IBM SPSS Statistics ver.25.0 を用いた．検定の有意水準は 5 %未満とし，有意傾向は 10%未満とした．

物事の考え方は個人に帰属するものである．しかし，男女の物事の考え方の傾向に違いがあると指摘されている（アラン・バーバラ，2006；ジョン，2003；佐藤，2017；八ッ橋，2015）ことから男女別に比較した．また，中学校・高校の柔道授業の提案に対する学習者の考えに関する先行研究（林ほか，2021b）において，同じ質問に対して男女の回答に違いが見られる傾向があったと指摘されているからである．男女の視点から学習内容や方法に対する学習者の考えを明らかにすることは，今後の中学校・高校における柔道授業を検討するために有用であると考えられる．

Ⅲ　結果

表 1 は，男女別に回答数を比較した結果を示したものである．

表 1 の No. 1 より「男女別に授業を行いたいと思いますか？」について，χ^2 検定の結果，有意な差が見られた（$\chi^2(2) = 13.324$，$p = 0.001$）．次に，残差分析を行った結果，「はい」と回答した割合について，男子（122 名，45.2%）は女子（6 名，16.7%）よりも有意に高かった．また，「いいえ」と回答した割

表１　今後の中学校・高校の柔道授業に対する大学生（中学校・高校の柔道授業経験者）考えにおける男女別の比較

No.	質問内容		選択肢	はい		いいえ		分からない	
1	男女別に授業を行いたいと思いますか？	男性	人数	122	**	49		99	
			%	45.2		18.1		36.7	
		女性	人数	6		14	**	16	
			%	16.7		38.9		44.4	
2	絞め技（首を絞める技）を学習したいと思いますか？	男性	人数	160		79		29	
			%	59.7		29.5		10.8	
		女性	人数	21		11		4	
			%	58.3		30.6		11.1	
3	関節技（肘を伸ばしたり、捻ったりする技）を学習したいと思いますか？	男性	人数	177		62		29	
			%	66.0		23.1		10.8	
		女性	人数	23		7		6	
			%	63.9		19.4		16.7	
4	護身術（相手の攻撃をかわして蹴る・叩くなどの反撃をする技）を学習したいと思いますか？	男性	人数	240		17		11	
			%	89.6		6.3		4.1	
		女性	人数	32		1		3	
			%	88.9		2.8		8.3	
5	乱取り（自由練習）を多くしたいと思いますか？	男性	人数	182		53		33	*
			%	67.9		19.8		12.3	
		女性	人数	21		5		10	
			%	58.3		13.9		27.8	
6	試合を多くしたいと思いますか？	男性	人数	173		65		30	
			%	64.6		24.3		11.2	
		女性	人数	20		8		8	
			%	55.6		22.2		22.2	
7	友人とだけ乱取りや試合をしたいですか？	男性	人数	109		116		43	
			%	40.7		43.3		16.0	
		女性	人数	17		13		6	
			%	47.2		36.1		16.7	
8	いろいろな人と乱取りや試合をしたいですか？	男性	人数	167		68		33	
			%	62.3		25.4		12.3	
		女性	人数	22		10		4	
			%	61.1		27.8		11.1	
9	自分よりも大きな人や強い人と乱取りをしたいですか？	男性	人数	145		91		32	
			%	54.1		34.0		11.9	
		女性	人数	20		9		7	
			%	55.6		25.0		19.4	
10	異性と乱取りや試合をしてみたいですか？	男性	人数	53		168		47	
			%	19.8		62.7		17.5	
		女性	人数	9		17		10	
			%	25.0		47.2		27.8	

**：$p < 0.01$，*：$p < 0.05$

合について，女子（49名，38.9%）は男子（14名，18.1%）よりも有意に高かった．男子の男女別に授業を行いたい自由記述の理由を整理した結果，男女の体格や力の差によって女子が怪我することを心配していること（のべ56名），男子が女子に気を遣うこと（のべ39名），男女の習熟度の違いによる授業進行の遅れを心配していること（５名），その他（11名）であった．女子の男女別に授業を行いたくない理由について，男子の存在が自分の学習効果を高めること（６名）．男子が行う柔道に興味・関心を持っていること（４名），その他（４名）であった．

表１のNo.２より「絞め技（首を絞める技）を学習したいと思いますか？」について，χ^2検定の結果，有意な差が見られなかった（$\chi^2(2) = 0.025$，$p = 0.988$）．

表１のNo.３より「関節技（肘を伸ばしたり，捻ったりする技）を学習したいと思いますか？」について，χ^2検定の結果，有意な差が見られなかった（$\chi^2(2) = 1.115$，$p = 0.561$）．

表1のNo.4より「護身術（相手の攻撃をかわして蹴る・叩くなどの反撃をする技）を学習したいと思いますか？」について，χ^2検定の結果，有意な差が見られなかった（χ^2（2）＝1.951，p＝0.384）．

表1のNo.5より「乱取り（自由練習）を多くしたいと思いますか？」について，χ^2検定の結果，有意な差が見られた（χ^2（2）＝6.378，p＝0.041）．次に，残差分析を行った結果，「分からない」と回答した割合について，女子（10名，27.8％）は男子（33名，12.3％）よりも有意に高かった．

表1のNo.6より「試合を多くしたいと思いますか？」について，χ^2検定の結果，有意な差が見られなかった（χ^2（2）＝3.547，p＝0.170）．

表1のNo.7より「友人とだけ乱取りや試合をしたいですか？」について，χ^2検定の結果，有意な差が見られなかった（χ^2（2）＝0.721，p＝0.697）．

表1のNo.8より「いろいろな人と乱取りや試合をしたいですか？」について，χ^2検定の結果，有意な差が見られなかった（χ^2(2)＝0.117，p＝0.943）．

表1のNo.9より「自分よりも大きな人や強い人と乱取りをしたいですか？」について，χ^2検定の結果，有意な差が見られなかった（χ^2（2）＝2.179，p＝0.336）．

表1のNo.10より「異性と乱取りや試合をしてみたいですか？」について，χ^2検定の結果，有意な差が見られなかった（χ^2（2）＝3.447，p＝0.178）．

Ⅳ　考察

表1のNo.1より，「男女別に授業を行いたいと思いますか？」について，男子で「はい」と思っている者の割合が女子よりも高く，女子で「いいえ」と思っている者の割合が男子よりも高いことが明らかとなった．

先行研究における同様の質問に対して，男子は「はい（38名，57.6％）」，女子は「いいえ（3名，50.0％）」と回答した人数の割合が高い傾向にあったが，有意な差は認められなかったと報告されている（林ほか，2021）．しかし，本研究では，十分な回答数を集めることができたために，男子「はい（122名，45.2％）」，女子は「いいえ（14名，38.9％）」と回答した者の割合が有意に高くなり，先行研究のデータを結論付けることができた．

前述の先行研究の考察では，特に男子が立ち技，固め技（寝技）ともに異性と密着する状況になることを過剰に意識していることが原因であると指摘されている．その具体的な理由として，「中学校や高校の柔道の授業で異性の生徒と技の学習をした経験があったのかもしれない」「異性と乱取りをした際に，男子は女子の能力に合わせて手加減をしなければならないために，全力で勝負ができずに面白くないと感じたのかもしれない」「女子は男子から手加減されながら乱取りをするために面白くないと感じたのかもしれない．言い換えると同じようなレベルの同性と思いっきり攻防を楽しみたかったのかもしれない」「周りから異性の生徒と学習している様子を見られることが恥ずかしかったのかもしれない．つまり，異性と接触することや視線を避けるために，男女別に（男女別習で）授業を行いたいと思っている」ことが指摘されている．しかし，これらはあくまでも推論である．本研究では，男女に具体的な理由を自由記述させたものから考察を加える．

男子が男女別に授業を行いたい理由は大きく3つに分類される．1つ目は，「男と女の体格差が違うから」「男女で力の差があるから」「体格差が大きく違うから危険である」「力や体格の差が大きく危険性があると思うから」「武道は特に身体が接触する授業であるため，また男女では身体能力（主に力）が大きく違うため安全に行うために別々に行う必要があると考えた」など男女の体格や力の差によって女子が怪我することを心配している理由であった（のべ56名）．2つ目は，「遠

慮をしてしまう」「気を遣わなくていいから」「加減や気を遣ってしまう」など男子が女子に気を遣うという理由であった(のべ39名).
３つ目は,「進むスピードが違うと思う」「授業の進行に関わると思うから」「進むのが遅い気がする」など男女の習熟度の違いによる授業進行の遅れを心配している理由であった(５名).ただし,男子の回答は,女子と組んで技の練習や乱取りをすることを想定して回答している可能性が考えられることから,今後の調査において「男女がお互いに組んで技の練習や乱取りをしないという前提において,男女共習で授業を行いたいと思いますか？」という質問を明確に行う必要がある.

前述の２つ目の理由から,いかに男子が女子に気を遣っていることが明らかになった.この男子が女子に気を遣うことについて,近年の男子は女子同様に異性から,どのように思われているのかを気にする傾向にあると考える.したがって,女子の視線を気にせずに男子は伸び伸びと柔道をしたいために,男子は女子と分かれて授業を受けたいと思っていることが考えられる.なお,大学における柔道授業では,男女別習は男女共習よりも伸び伸びと柔道を楽しんでいたと報告されていることからも(林ほか,2021b),男女別習の方がお互いに異性の目を気にすることなく,伸び伸びと柔道に取り組むことができるかもしれない.つまり,男女別習の柔道授業の実施が学習効果を高める可能性を示唆している.

ただし,本研究結果の妥当性を確かめるために,男女別習,男女共習,男女共習(一部男女別習)における授業の学習効果を検証することが必要である.また,実際に中学生や高校生においても同様の検証をする必要がある.なお,保健体育科教員を養成する大学における柔道授業では,男女別習の柔道授業を実施し,学習効率を求めることは望ましくない.なぜなら,2010年度の文部科学省の学校教員統計(データえっせい,online)によると,中学校体育科の女性教員の割合は28.9%であり,男子が体育科の教員となった場合,女子生徒に柔道を指導する機会が多くなるからである.つまり,大学の柔道授業の中において,男子が女子の学習をサポートすることは,男子が女性の特性を踏まえた指導力を向上させることに役立つからである.

一方,女子が男女別習で授業を行いたくない理由は大きく２つ存在する.１つ目は,「上手な人の動きをまねできるから」「男子が手本になるから」「男子の迫力を見て学べるから」「男子は柔道授業の経験者が多く上手い人が多いので教え合いができるから」など男子の存在が自分の学習効果を高める理由であった(６名).２つ目は,「男子の柔道も見たいから」「男子の技は力強く見ていて面白いから」「力の違いを知るため」「互いの良さが分かるから」など男子が行う柔道に興味・関心を持っているからであった(４名).

男女共習経験のある女子の中には,選択肢の少なさから自分のスキルを向上させるためには,男子をお手本にしたり,男子と練習をせざるを得なかったりするために無意識に受け入れている可能性がある.また,女子は男子より一般的に早熟であることが影響しているかもしれない.

一般的に女性は生まれながらにして男性に比べて言語能力が高く発達も早いと指摘されている(アラン・バーバラ,2006).その事例として,1998年のイギリスにおける言語能力が求められる教科の教師男女比について,女性が約73%に対して男性は27%であったと報告されている.また,1日平均のコミュニケーションとして活動については,女性の２万回に対して男性は7,000回と言われている.さらに,同性同士の会話におけるセックスや異性関係の占める割合については,女性は22%,男性は18%であったというデータが示されており,さらに女性はその内容を露骨に語り合うとも言われている.したがって,女子は異性を意識して「恥ずかしい」とあま

り思わないことが考えられる．ただし，性自認「自分の性をどのように認識しているのか，どのような性のアイデンティティ（性同一性）を自分の感覚として持っているかを示す概念（法務省，online）」が指摘されており，性に対する考えが多様かつ複雑になっている．このことから，性別を超えた授業の在り方（宮本，2020）を検討していくことが重要になるであろう．

以上のことから，女子は男子をお手本として学習効果を高めようとしていたと推察される．また，柔道に対する興味や関心が高いことがうかがわれる．女子にとって男子の柔道をしている様子が学習効果を高め，関心や意欲を高めることから，男女別習で授業を実施する意義が示唆された．さらに，女子が男子のサポートを望んでいることから，中学生・高校生においても運動能力の高い男子の協力を得て女子の学習をサポートすることによって，円滑に授業を進めることが期待できる．

表１の No.5 より，「乱取り（自由練習）を多くしたいと思いますか？」について，女子で「分からない」と思っている者は，男子よりも高い傾向にあることが明らかとなった．一般的に，受け身や技だけの学習は反復練習の繰り返しになるために飽きやすいと考えられる．そのため，実践形式の乱取りや試合を好む傾向にある．そのことは，今後の中学校や高校における柔道の授業では，乱取りを多くした方がよいと思っている大学生が多いことが報告されていることからも理解できる（林ほか，2021b）．また，乱取りや試合がある程度できた者は，その楽しさを理解しているために，もっと乱取りや試合を多くしたいと思うことが指摘されている（林ほか，2021b）．他のスポーツにおいても，基本練習よりも早く実践練習やゲーム（試合）をしたいと思う者は多いと思われる．しかし，本研究では，女子は乱取りを多くしたいかどうか「分からない」という回答をする者の割合が多かった．この要因は，乱取りを経験したことがないのか，それとも乱取りを楽しめる程度のレベルに達していない可能性が推察される．乱取り経験について，実際の中学校や高校の柔道の授業では，実施時間数が足りないことや怪我の危険性があることから乱取りがあまりできなかったことが推察される．また，本研究では，武道の授業において柔道を選択していないことが考えられるために，今後，柔道の授業経験の有無による検討が必要である．

Ⅴ　今後の課題

本研究の対象者は，主にスポーツ・体育系の大学生であり特殊な集団である．したがって，中学生・高校生の柔道授業を受けた学習者全体の考えとして結論付けることはできない．今後，中学生・高校生の柔道授業を受けたスポーツ・体育系の大学生以外の対象者のデータを調査することが必要不可欠である．

男女共習経験のある女子のスポーツ環境（指導経験やスーツ経験等）は多様である．その中には，男子をお手本にしたり，男子と練習をせざるを得ないなど選択肢が限られていることも十分に考えられる．今後の男女の比較において，女子のスポーツ環境も考慮に入れてデータを収集することが重要である．

Ⅵ　総括

本研究の目的は，今後の中学校・高校における柔道授業の内容や方法に対する大学生（中学校・高校の柔道授業経験者）の考えを男女別に比較し，今後の中学生・高校生における柔道授業を検討することとした．その結果，以下のことが明らかとなった．

1．男女の習熟度の違いによって授業の進行が遅れる可能性が示唆された．このことから，男女別習で授業を行うことによって，学習者の習熟度に合わせた授業を行うことが可能である．
2．男女共習（一部男女別習）で授業を実施する場合，運動能力の高い男子の協力を

得て女子の学習をサポートすることによって，円滑に授業を進めることが期待できる．

3．女子は乱取りを多くしたいかどうか判断がつかなかったことから，その理由を解明するために，乱取り経験の多い女子を対象に研究を進める必要がある．

文献

アラン・ピーズ・バーバラ・ピーズ（2006）藤井留美訳，話を聞かない男，地図を読めない女―男脳・女脳が「謎」を説く―（第17刷）．主婦の友社．

データえっせい（online）中学校教員の女性比（教科別）．http://tmaita77.blogspot.com/2014/05/blog-post_24.html，（参照日2021年11月27日）．

林　弘典（2017a）びわこ成蹊スポーツ大学における柔道の授業について．びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要，14：205-208.

林　弘典（2017b）実践柔道論．小俣幸嗣（編著）．メディアパル，pp.82-97.

林　弘典・黒澤寛己・坂本道人・生田秀和・石川美久（2021a）中学校・高校の保健体育科教員を養成する大学における柔道授業の在り方についての提言．びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要，18：25-35.

林　弘典・石川美久・田中　勤・生田秀和（2021b）中学校・高校の柔道授業の提案に対する学習者の考えについて．関西武道学研究，30（1）：3-12.

Hayashi, H., Anata, K., Uchimura, N., Shoda, H., & Ishikawa, Y.（2020）. The influence of being thrown unexpectedly in Judo on brain injuries: A study of junior high, high school, university student experts. The 2020 Yokohama Sport Conference.

法務省（online）性的指向及び性自認を理由とする偏見や差別をなくしましょう．https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04_00126.html，（参照日2021年11月27日）．

石川美久（2017）実践柔道論．小俣幸嗣（編著）．メディアパル，pp.43-58.

Ishikawa, Y., Anata, K., Hayashi, H., Uchimura, N., & Okada, S.（2020）. Influence of fatigue on head angular acceleration in judo high-intensity exercise. Archives of Budo, 16: 99-106.

JAPAN SPORT COUNCIL（online）学校事故事例検索データベース．https://www.jpnsport.go.jp/anzen/Default.aspx?TabId=822，（参照日2021年10月14日）．

ジョン・グレイ（2003）大島渚訳，ベストパートナーとなるために（第5刷）．三笠書房．

小林恵子（2011）続発する柔道事故における社会的及び法的責任．季刊教育法，168：19-25.

宮本乙女（2020）体育の男女共習・別習を考える．体育科教育学研究，36（2）：27-32.

文部科学省（online）武道・ダンス必修化．https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1330882.htm，（参照日2021年9月14日）．

文部科学省（2016）高等校学習指導要領解説保健体育編・保健編（4版）．東山書房．

文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説保健体育編（5版）．東山書房．

日本武道学会（2016）中学校武道実施への対応：指導成果の検証．武道学研究，48（3）：153-207.

佐藤雅幸（2017）正しい声がけ・伝え方で実力を伸ばす！　女子選手のコーチングメソッド（第2刷）．メイツ出版．

生田秀和・穴田賢二・石川美久・内村直也・林　弘典（2020）柔道の大外刈りによる頭部外傷に対するマウスガードの装着効果．武道学研究：53別冊．

生田秀和・石川美久・林　弘典（2021）中学校・高校の柔道授業における学習者の経験した指導内容について．関西武道学研究，30（1）：13-20.

田中　敏（1996）実践心理学データ解析．新

曜社.
田中　敏・山際勇一郎（1989）新訂ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法（2版）．教育出版.
内田　良（2013）柔道事故．河出書房新社.
八ッ橋賀子（2015）女子選手のコーチング“特性”を知り，力を引き出すための40のヒント．体育とスポーツ出版社.
全日本柔道連盟（online）事故報告書について．https://www.judo.or.jp/coach-referee/accident-report/，（参照日2021年9月14日）.
全日本柔道連盟（2020）柔道の安全指導　柔道の未来のために（5版）. 全日本柔道連盟.